
仮面ライダーディケイド外伝 ~ DI:END ~

カムイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド外伝

↓DI:END↓

【Nコード】

N6022H

【作者名】

カムイ

【あらすじ】

これは海東大樹が土達と出会う前の物語。大樹は、すでに9つの世界を旅していた！だが、その世界は土達が知っている世界とは全く違い……！？

第1話：World of DIEND（前書き）

この小説は「仮面ライダーディケイド」が放送終了する前に書き始めました。設定が多少テレビとは違いかもしれませんが、ご注意ください。

第1話：World of DIEND

ビルも、車も、コンビニもない、辺り一面木々や山々に囲まれている、何処にでもある田舎な村。

そんな村に何故があるコンクリートの道路を、1人の男が全身血まみれで必死に走っている。

「ハア…ハア…さすがにダークローチ20体はきついな……」

血まみれの男は今にも息絶えそうな体で声を出した。

男は何かから逃るように走る。恐らく、さっき男が言った《ダークローチ》からだろう。

この男の名は、海東 大樹。

元はこの世界を統治している《フォーティーン》という者の命令で、《優しさ》がない民、及びこの世界に残存しているライダーを捕獲し、自らが考えた教育方法で《善良》な民にしていた。

しかし、実際に行われていたのは自分が考えた教育方法ではなく、フォーティーンが考えた、脳内に大量のバグを注入し、そのバグによって人を操らせる教育方法であるのに気づき、ライダーだった自分の兄、海東純一もこの教育方法の餌食になってしまい、正気を失った兄を救うため、フォーティーンに反乱した男だ。

今、大樹が全身血まみれなのは、《ダークローチ》というフォーティーンが所有しているゴキブリに似た兵士による攻撃を受けたから

だ。

大樹はフォーティーンの本拠地から随分遠くまで逃げてきたが、大量に出血したせい、ついにコンクリートの道路の上に倒れてしまった。

「ハア……ハア……クソッ…僕もここまでか…！ゴ、ゴメンよ……
兄さん……必ず……兄さんを助け出すって……約束したのに……」

大樹は仰向けで倒れている。彼の目には、微かに夜空に浮かぶ大量の星が映っている。恐らく、都会ではこんなに見えるどころか、星1つも見えないだろう。

所々ダークローチによる攻撃で破れている青色の警備員が着るような服が、大量の血によって赤色に染まっていく。

大樹は必死に、ゆっくり前を見ると、前方に広がる暗い影から1人の男が歩いて来る。

フォーティーンの部下か……大樹はそう考え、自分の人生がここで終わる事を覚悟していた。しかし……、

「……君は何の為に生きている？何の為に戦っている？」

男は大樹の前に直立しながら聞いた。

大樹は自分がこの男によって殺されていないことに驚いたが、冷静に男の質問に答えた。

「……兄さんが……囚われているんだ……！だから……僕は……」

兄さんを助け出すために……生きて、戦っているんだ!!」

息絶えそうな体で、大樹は必死に叫んだ。

「……………そうか、君には生きる意味……………戦う意味があるんだな」

男は少し、大樹の生き方に憧れるように言った。

「生きる意味も戦う意味もない俺が持つより……………君が持った方が《コイツ》も喜ぶ」

男はそう言つと、何処からか、一丁の拳銃を取り出した。他の拳銃とは少し違う形をした拳銃だ。

「……………受け取りたまえ。君なら……………《コイツ》の力を最大限に引き出せる」

そう言つと男は大樹の目の前に、手に持っていた拳銃、《ディエンドライバー》をそつと置いた。

大樹は何が何だか分からなかったが、余計な質問はせず、ずっと黙っていた。

「君にはこれから幾つかの世界を旅してもらつ。もちろん、この旅は無駄ではない。君のお兄さんを助けるための旅だ」

今まで沈黙を保っていた大樹だが、男の発言を聞いて、ついに沈黙を破った。

「……………旅……………!??どういふ……………事だ……………!」

「いずれ……分かる」

男はそう答えると、男の後ろに突如現れた銀色の壁のようなモノに、
ゆっくり歩きながら入っていき、この場を去った。

ここから、始まったのだ。

海東 大樹の、兄を助けるための、長く険しい道が……。

第2話：クウガのセカイ

大樹に《ディエンドライバー》を渡した男が消え去った数分後、大樹は仰向けの状態から必死で起き上がり、後ろにポツンと置いてある《ディエンドライバー》を手に取った。

「……………旅って何だ！？……………何なんだ、コレは！」

大樹は《ディエンドライバー》を見つめながら、男の意味が分からない発言を頭の中で何度も繰り返し、考えていた。

「いったい、どういう事なん……………何だ、コレ」

大樹はそう言うと、《ディエンドライバー》の左横の挿入口に一枚のカードが入っているを見つけ、それを抜き出した。

「masked……………コレは……………ライダー！？」

大樹が抜き出したカードには1人のライダー……………《仮面ライダーディエンド》の絵が写っていた。

「何なんだ、このライダーは！？今まで僕が捕獲したライダーに……………こんなヤツはいなかったぞ！！」

大樹は驚く事が多すぎて、自分が負っている傷の痛みなど忘れていた。

その時だった。大樹を囲む薄暗い木々や山々が、突然さっきの銀色の壁のようなモノに変わったのだ。

「な……………！？これは……………さっきの……………！！」

大樹は何が起きているのか分からなく、混乱していた。しかし、その数十秒後、大樹は驚くというレベルを越えた感情を抱いた。

「……………どこだ……………ここ……………」

銀色の壁のようなモノが全て消えた瞬間、大樹の目には、ビルが建ち並び、所々に飲食店やその他の店があり、沢山の人が歩いている、昼間の都会が映ったのだ。

大樹は、いろんな方向に歩いている人混みの中に1人、ポツンと立っていた。

「な……………！さっきまで夜だったのに……………！！」

大樹は、突然の出来事に驚きながら、ふと隣にあった小さな電気屋のショーケースのガラスに映った自分の体を見た。

「……………！！傷が……………治ってる……………！！服も……………違う……………！！！！」

そう、つい先程まで血だらけだった大樹の体は、全て治っていた……………というか、最初から体に傷が無かったかのように見える程、傷が完治していた。

しかも、大樹が着ていた青色の警備員が着るような服も、いつの間にか警察官らしき服装に変わっていた。

何があだか分からない………混乱していた大樹はふと、電気屋のショーケースの中にある、1台の大型液晶テレビの画面に目がいった。

「……………速報です、今日午後未明、東京都内の工場で、未確認生命体と思われる生物が現れました！近隣住民は直ちに避難してください！繰り返します、今日午後未明……………」

ニュースキャスターの慌ただしい表情の隣に、工場で《未確認生命体》と言われる怪物が暴れまくっている映像が流れていた。

「何なんだ、この怪物は……………！ダークローチ以外にも、こんなヤツがいるのか……………！」

その時、混乱している大樹の腕を、警察官の制服を着た1人の男がガシツ、と掴んだ。

「こんな所で何をしているんだ、海東巡査！！まったく、未確認生命体が現れたというのに……………急いで現場に急行するぞ！！」

60代半ばのちょびヒゲが生えている、ガンコ親父のような警察官は、大樹の腕を掴むと、すぐ近くの道路に駐車しているパトカーの方向に引ッ張って、パトカーの後部車席に無理矢理乗した。車内にいるのは、大樹とガンコ親父のような警察官の2人だけだ。

「ちょ……………待つ……………僕は警察官じゃ……………」

大樹の弁解も聞かず、ガンコ親父のような警察官は、パトカーのエンジンを入れ、そこそこのスピードで現場の工場へと向かった。

第3話：旅の目的

数分後……大樹とガンコ親父のような警官を乗せたパトカーは、現場の工場に到着した。

ガンコ親父のような警官は、すぐ目の前でパトカーを盾にして未確認生命体と銃で応戦している、よくドラマで見る刑事のような服装をした男に、自分達が遅れた事を謝った。

「も、申し訳ございません、一条刑事！！海東のバカが油を売って……」

平謝りするガンコ親父のような警官に、一条刑事は、

「そんな事はどうでもいい！！早く所定の位置に着いて、応戦するんだ！！」

怒鳴る一条刑事にガンコ親父のような警官は、急いで所定の位置に着き、腰に付いているホルスターから銃を取り出し、未確認生命体と応戦した。

一方、大樹はパトカーから出たものの、応戦はせず、その場で立ち止まり、未確認生命体をずっと見ていた。

「アレが……未確認生命体……。やっぱりダークローチと似てるな……」

その時、大樹の後ろからバイクが猛スピードでやって来る。

「退いてください!!」

バイクに乗っているヘルメットを着けた男は、大樹にそう叫ぶ。大樹は慌ててバイクの進行方向から退いた。

疾走するバイクは、未確認生命体がいる方向に向けて爆走し、手前にあるパトカーとパトカーの隙間をくぐり抜け、未確認生命体に突撃した。

「ガ…ガギ、アギゴガ！（グツ…アツ、何だ、貴様は！）」

蜘蛛のような姿をした未確認生命体は、人間には理解できない言葉で喋っている。

「な、何だ、あの男は!!」

一条刑事と共に応戦していた警官は言った。しかし、一条刑事は、まるでバイクの男を待ってたかのように笑みをこぼした。

バイクの男は、バイクから降り、腰に両手を当てた。

すると、腰には奇妙な形をした、異様に大きいベルトが現れた。

そしてバイクの男は、まるでテレビのヒーローがするようなポーズをとり、両手でベルトの右側を押し、

「変身!!」

男はそう叫ぶと、その体は赤色の戦士、《仮面ライダークウガ》に変わった。

「ハアッ！！」

クウガは勢いよく未確認生命体に殴りかかる。

さっきのバイクでの突撃が効いたのか、未確認生命体は動きが鈍くなり、クウガのパンチは見事に命中し、未確認生命体は吹っ飛び、パトカーに思いつきり背中をぶつけた。

クウガはここで一気にトドメを刺そうと、空高く飛び、未確認生命体に飛び蹴りを食らわそうとする。しかし、

「ド、ガドダバ！！（調子に乗りやがって！！）」

そう言うとき未確認生命体は、口から粘着性の糸を吐き出し、クウガの右足に絡ませた。

「ク、クソッ！！」

未確認生命体はクウガの右足に絡まっている蜘蛛糸をおもいつきり引っ張り、自分の方向にやって来るクウガの腹をおもいつきり殴った。

「グハアア！！」

殴られたクウガは、工場の壁に飛ばされ、工場の壁をぶち抜いた。

「クッソ、マイティだけじゃムリみたいだな。なんか俺の足に糸

ついでるし……よし、アレになるか!!」

立ち込める煙と瓦礫の中、倒れ込むクウガはそう言うと、ガバツと立ち上がり、自分のバイク、《トライチェイサー》がある場所まで走っていった。そして、その場所にたどり着くと、バイクの右ハンドルでもあり、警棒にもなる、トライアクセラーを掴んで抜き出した。

「超変身!!」

クウガがそう叫ぶと、クウガの体は赤色から紫色に、右手に持っていたトライアクセラーは紫色の大剣タイタンソードに変わり、《マイティフォーム》から《タイタンフォーム》にフォームチェンジした。

「ハアツ!!」

タイタンフォームになったクウガは、右手に持っているタイタンソードで右足に絡まっている粘着性の頑丈な糸をいとも簡単に断ち切った。

「ド、ダドダバ!!（な、俺の糸が!!）」

クウガは右足に絡まっていた糸を断ち切った後、未確認生命体がいる所まで走っていった。

「ガ、ゴガ!（ク、クソ!）」

こちらに走ってくるクウガに、未確認生命体は矢のような形をした糸を口から飛ばした。

しかし、クウガは飛んでくる糸をタイタンソードで切り裂き、遂に未確認生命体がいる場所までたどり着いた。

「くらえ!!」

クウガはそう言いつと、タイタンソードを未確認生命体のみぞおち部分に突き刺した。

「ガ、グガアアア!!」

みぞおち部分にクウガの紋章が浮かび、クウガが素早くタイタンソードを抜いた数秒後、未確認生命体は爆発し、その体は跡形もなく消え去った。

「す、すごい……世界にはこんなライダーもいるのか……」

未確認生命体を倒し、クウガがトライチェイサーで立ち去った数分後、大樹は驚きが隠せなかった。

その時、大樹の腰に付いているホルスターに入っているディエンドライバーが振動し始めた。

「……………？何だ……………？」

不思議に思いながらも、大樹はホルスターに入っているディエンドライバーを手にした。

その瞬間……………！！

「……………ッ！？グ、アア……………！！頭が……………割……………れる……………ッ！！」

そう、大樹がディエンドライバーを手にした瞬間、大樹の脳に大量のディエンドライバーについての情報が流れ込んだのだ。

ディエンドライバーの使い方、旅の目的……………ありとあらゆる情報が大樹の脳に流れ込む。

「……………！？き、君、大丈夫か！？」

大樹の異変に気付き、一条刑事が大樹がいる場所まで駆け寄る。

「おい、しっかりしろ！！おい！！」

一条刑事は必死に呼び掛けるが、激しい頭痛で苦しむ大樹には聞こえていない。

「……………ハア……………ハア……………す、すみません……………ちよつと頭痛が……………もつ大丈夫です……………」

数秒後、大樹は意識もうろうな状態で言った。

「ほ、ホントに大丈夫か!？」

一条刑事が心配して大樹に問う。

「は、ハイ……もう大丈夫です……」

一条刑事の問いに大樹は答えた。

「そ、そうか。あまり無茶するなよ」

一条刑事はそう言うと、小走りで現場まで戻っていった。

「そうか………そういう事か……」

数分後、大樹は精一杯の力で立ち上がった。

大樹の顔はさっきまでの苦痛の表情とは違い、ずっと抱え込んでいた悩みが解決したような、すっきりとした表情となっていた。

「……………あの男が言った事は間違ってたんだ……………!!この僕の旅は決してムダじゃない……………!!僕の……………旅の目的は……………全ての世界のライダーを使い、フォーティーンを倒し……………兄さんを助ける事だ……………ッ!!」

第4話：超変身 DIEND

日が暮れ始め、昼から夜に変わっていく頃……バイクに乗った1人の男がある喫茶店の前に到着した。

男はゆつくりとバイクから降り、被っていたヘルメットを右手に持ちながら、喫茶店

「ポレポレ」の店内に入ろうとした。

この男の名は、五代 雄介。

今日の昼間に、仮面ライダークウガとして未確認生命体と戦っていた人物である。

「待ちたまえ」

「ポレポレ」の前で腕を組ながら立っている男……海東 大樹が、店内に入ろうとした雄介に話しかける。

「君……クウガだね。…いや、未確認生命体第4号の方がいいか」

雄介のすべてを見透かしたように、大樹は言う。

雄介は、一条刑事や沢渡以外で自分がクウガだということを知っている人物がいるということに驚いた。

「……………なんで…その事を……………」

驚きを隠せない雄介に、大樹は、

「そんな事はどうでもいい。僕は君が持っているクウガのベルト……アークルが欲しいんだ。大人しく渡してくれたら、何もしないからさ」

雄介には大樹が何を言っているのか分からなかった。そもそも何故アークルを欲しがっているのか……雄介には大樹の言葉すべてが謎だった。

「……………あなたは……………何者なんですか……………！？」

雄介の問いに大樹は、

「僕が何者か……………うゝん、そうだな……………とりあえず……………」

「ピー……………ガガ……………五代……………江戸川区で未確認生命体が確認された……………」

トライチエイサーから聞こえた一条刑事の声が、大樹の声を掻き消した。

雄介は未確認生命体出現の報を知ると、手に持っていたヘルメットを被り、素早くトライチエイサーに乗った。

ブルルン……………ブルルン……………。

雄介はトライチエイサーのエンジンをかけると、振り替えてヘルメットの奥から大樹を睨み付けた。そして、急ぐように去っていった。

数分後……………大樹はディエンドライバーを手に持ちながら、

「さて……クウガとコイツのお手並み拝見といこうか……」

一方、未確認生命体がいる江戸川区では……

「皆、頑張れ！！なんとかこの場を持ちこたえるんだ！！」

龍のような顔つきをした未確認生命体と銃で応戦しながら、一条刑事は叫んだ。

状況は、最悪だった。

現場に駆けつけた警官50人のうち32人は死傷者となった。

もはやクウガ以外に打つ手は無い……。

「頼む……五代……早く来てくれ……！！」

一条刑事はそう言いながら、未確認生命体と応戦を続けていた。

その瞬間……！！

「ハアッ……！！」

海のように青い、1人の戦士……仮面ライダークウガ ドラゴンフォームが手に持っているドラゴンロッドで未確認生命体に攻撃した。

「……！！五代……！！」

一条刑事は嬉しさのあまり、思わず叫んでしまった。クウガならあの未確認生命体を倒すことができる……そう思っていたからだ。

しかし……

「グ、ダグゼバー！！（フン、ザコが……！！）」

クウガが攻撃した際に未確認生命体がドラゴンロッドを右手で掴んで防いでいたせいで、クウガの攻撃は全く効いていなかった。

「ガガギガ……！！（くたばれ……！！）」

未確認生命体は掴んだドラゴンロッドを地面に振り下ろし、クウガを地面に思い切り叩きつけた。

「グハアア……！！」

あまりの衝撃でクウガは身動きができない。

そこを狙ったのか、未確認生命体はクウガの首を物凄い力で握り締めた。

「グ……ガ……アアア！！」

首を握り締められたクウガは身動きができない。

「ご、五代……！！」

クウガの首を握り締めている未確認生命体の右手を銃で撃ちながら、一条刑事は叫んだ。

絶体絶命……まさにこの言葉通りの状況……。皆が生きる希望を失いかけたその瞬間……！！

バキューン、バキューン！

銃で発砲する際に鳴る特殊な機械音が鳴り響いた。

「ガ、ガゲガ！！（お、俺の手が！！）」

さっきの発砲により、未確認生命体の右手が跡形もなく消え、握り締められていたクウガは地面に落とされた。

「……もうちょっと骨のあるヤツかと思ってたけど、とんだ勘違いだったね。君……いや、クウガには僕のライダー軍団員第1号になつてもらつ予定だったけど、君みたいな弱いヤツ……僕のライダー軍団には必要無い」

未確認生命体に銃口を向けて、1人の男……海東 大樹が言った。

「き、君は……昼間の……!!」

大樹の姿を見て、一条刑事は驚いた。

「さてと……お前の力をみせてもらうよ」

大樹はそう言うと、ディエンドライバーの左横にある挿入口にディエンドのカードを挿入し、グリップをスライドした。

「Kamenride!!」

ディエンドライバーはそう音声を発すると、大樹はディエンドライバーを上に向け、そして……

「変身!!」

「DI END!!」

ディエンドライバーはそう音声を発すると、大樹の体を青色の戦士、《仮面ライダーディエンド》に変えた。

「グ、ダグザバー!! (テメエ、ブツ殺す!!)」

未確認生命体はそう言う、デイエンドに殴りかかった。

「所詮はただの単細胞……そんなヤツに僕は殺せないよ……」

大樹はそう言う、腰に付いているカードホルダーから一枚のカードを取り出し、デイエンドライバーの挿入口に入れ、グリップをスライドした。

「Attack ride Invisible!!」

デイエンドライバーそうが音声を発すると、デイエンドの体はゆっくりと消えていった。

「ガグ、ガギガ! ? (な、消えた! ?)」

未確認生命体は自分の攻撃がかわされたことよりも、敵の姿が消えた事に驚いている。

「めんどくさいから、一気に決めるよ……」

未確認生命体の後ろにデイエンドは現れ、またカードホルダーから一枚カードを取り出し、デイエンドライバーの挿入口に入れ、グリップをスライドした。

「Final Attack ride
DI DI DI DI
DIEND!!」

ディエンドライバーがその音声を発すると、大樹は未確認生命体に銃口を向け、銃口からは円形に並んでいる複数のカードが目標を定める様に重なる。

「ガグガアア！！（ふざけんなああ！！）」

敵の姿を確認した未確認生命体は今一度襲いかかった。

「これで終わりだ……」

ディエンドはそう言うと、ディエンドライバーのトリガーを引いた。

ズガアアアアッ！！

ディエンドの一撃は見事未確認生命体に命中した。

「グアアアアアアッ！！」

未確認生命体はそう叫ぶと、爆炎に包まれ、跡形もなく消え去った。

「あなた……一体何なんです……！？」

クウガはディエンドに問う。

「……………通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておきたまえ」

ディエンドはそう言うと、暗い闇夜にゆっくりと消える様に立ち去った。

「ハァ、そう簡単に強いライダーは見つからないか……………」

夜のネオン街を溜め息をつきながら大樹は歩いていた。

その時、大樹の目の前に以前現れた銀色の壁のようなモノが現れ、周りの景色を覆った。

「……………！？コレは……………この前の……………！！」

突然の出来事に、大樹は驚く。

数秒後……………周りの景色を覆っていた銀色の壁のようなモノは消えた。

「……………？さっきと景色が何も変わってない……………」

今回はクウガのセカイに来たように景色が全く変わる事がなかった。

「何なんだ、一体……………！？また……………」

そう、またあの時のようにディエンドライバーが振動し始めたのだ。

大樹は恐る恐るディエンドライバーを手にする。

その瞬間……！！

「グ……アアア……また……か……」

前のような激しい頭痛が大樹を襲った。

……数分後、大樹を襲った頭痛は完全に消え去った。

「ハア……ハア……そうか……ここは……」

「アギトのセカイだ……！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6022h/>

仮面ライダーディケイド外伝 ~DI:END~

2010年10月9日11時47分発行